

世界無形文化遺産と 民族のアイデンティティ

— 南部アフリカ、チェワの祭りから

よしだ けんじ
吉田 憲司

民博文化資源研究センター



芸能や祭事は、人びとの結束を高める。逆に、結束を生むために芸能や祭事が考案されることもある。現代に生み出されたものでも、担い手にとっては、かけがえのない文化遺産だ。

民族単位の祭りの創造

南部アフリカのザンビアでは、一九八〇年代、主要民族が、「伝統を始めよう」をスローガンに、競って民族単位のあらたな祭り



第1回チェワ人の祭り「クランバ」。ザンビア、ムカイカ村にて (1984年)

を生み出していった。わたしが過去三〇年間かかわってきたチェワの人びとも、その動きのなかであらたな祭りを作り上げた集団のひとつである。

チェワの人びとが創始した祭りは「クランバ」という。「伝統を始めよう」をスローガンに、本来は葬儀の際に踊られる仮面舞踊「グレワムクル」と、女性の成人儀礼の際に踊られる女性の踊りを、それぞれの地域のチーフがワガワ・ウンディの前で披露するという祭りである。わたしは、その第一回のクラン

バに立ち会った。一九八四年のことである。その折、あと五〇年もして人類学者がやってきたら、きっとこの祭りがチェワの伝統的な祭りだと思ひ込むだろうなど、村人たちと笑いながら語り合ったものである。それから三〇年、すでにクランバは毎年八月最後の週末に開催され、「チェワ伝統の祭りクランバ」と称されて定着するにいたっている。

して九〇年代後半になると、今度は、各民族がそれぞれの民族の展示を目的とした博物館の建設で競い合うようになる。祭りは一時的なものだけに、そこで用いるような自分たちの遺産を、祭りを開く場所の近くで恒久的に展示しようという動きが起って来たのである。

仮面舞踊の世界無形文化遺産指定

チェワの社会についていえば、先に触れた仮面舞踊「グレ

ワムクル」——わたしがそのメンバーとなっている、ニャウとよばれる仮面結社の舞踊である——が、二〇〇五年、同じザンビアのルヴァレの人たちが継承している割礼儀礼にまつわる仮面舞踊「マキシ」とともに、日本の歌舞伎などにならんで、ユネスコの「人類の無形文化遺産に関する代表リスト」、いわゆる世界無形文化遺産に登録された。それをきっかけに、このチェワでも、またルヴァレでも、それぞれ祭りの場に博物館を作ろうという計画が動き出し、既に

設計図も出来上がってきている。三〇年前、わたしが調査を始めたときには、チェワという集団のあいだに仮面舞踊の伝統があること自体、ザンビアの外では、ほとんど知られていなかっただけに、感無量の思いがある。

祭りへの三か国の大統領の参列

チェワの人びとのあいだでは、二〇〇七年のクランバで、さらに画期的な展開が見られた。チェワの人びとは、現在、ザンビア、マラウイ、モザンビークにまたがって住んでいるが、ザンビアでおこなわれたこの年のクランバの祭りに、これら三か国の元首、大統領がごぞって参列したのである。このようなかたちで、ひとつの民族がまたがって住んでいる国の元首が、その民族の祭りに集うということとは、アフリカの歴史上、初めての出来事であろう。各国の元首は、それぞれ、やはりチェワ

の踊りの世界無形文化遺産指定を例に出し、チェワだけではなく、すべての民族の伝統文化の重要性の再認識の必要性を訴えるものであった。さらに、祭りのなかでは、それぞれの大統領に引き連れられるかたちで、ザンビア以外のチェワのチーフも、自分たちの地域のニャウの踊り手と女性の踊り手を帯同し、ザンビアのチェワの王ガワ・ウン

もっていなかった。それが、この年のクランバの祭りを通じて、ひとつの王国としての一体性、アイデンティティが表明されたことになる。

このように、今、文化は、祖先から受け継いだ、当たり前な慣習ではなく、それを活用すること、あらたな集団としてのアイデンティティを生み出し、あるいは国家を超えたあらたな地域共同体の政策を打ち出していく手段として活用されてきている。文化遺産を通じて、あらたな文化や集団が作り上げられてきているのである。そこには、「文化遺産」という、現代が生み出した概念の可能性と同時に危うさもまたみえかくれる。



3か国のチェワの舞踊を見守る、ザンビアのチェワの王ガワ・ウンディ。ザンビア、ムカイカ村にて (2007年)



王ガワ・ウンディの前で舞踊を披露するニャウの踊り手「マカンジャ」。ザンビア、ムカイカ村にて (2007年)